



魚の目が
見る夢

川崎ゆきお

「胃が夢を見るのですか」

「胃が夢を見させるのです。胃が見る夢ではありません」

「夢は頭で見るとでしょ」

「しかし、胃なのです。この夢は胃だなあと思いましたよ」

「ほう」

「腸もあります」

「腸の夢」

「喉もあるし、鼻もある」

「身体が夢を見させるのですか」

「そうです。悪いところがあると、そこが夢の発生源なんです。しかし、胃の夢じゃないし、喉の夢じゃない。きっかけですなあ」

「ほう、初耳です」

「耳が見せる夢もあります。別に音に関係した夢じゃないですがね」

「ほう。それは何ですかね」

「体調が良いときは夢を見ません。だから、最近はずまずです。どこか悪いところがあると、夢を見ます。悪いところとかは関係のない夢ですがね」

「それは不思議な話ですねえ」

「朝までぐっすり眠った。夢一つ見ないで……というのがいいのです。特に悪いところがないのでね」

「夢で健康状態が分かるのですか」

「熱があるときは、変な夢を見るでしょ。まあ、良い夢を見ることもあります」

「それは眠りが浅いということですね」

「寝入りばな、すぐに見る夢、明け方の夢、いずれも浅いですなあ」

「起きる直前、よく夢を見ますよ。まあ、いつ見たのかは分かりませんが。寝入りばな、確かに夢を見ることがあります。これは、すぐに起きときでないとは分かりません。そのまま寝ていたら、朝になって忘れていたりしますし」

「もう起きないといけないのに、無理とに寝ていたとき、連続してたくさんの夢を見ます」

「はいはい」

「腹具合が悪いとき、よく夢を見ましたよ。これは胃の夢か、腸の夢か、十二指腸か、食道の夢か、大腸かまでは分かりませんがね」

「ほう」

「魚の目が痛いときも、よく見ましたよ」

「魚の目が見る夢、それは前衛ですねえ」

「機械の中の幽霊ってのもありますしね」

「はいはい」

「悪いところがあるとき、悪い夢じゃなく、良い夢もよく見ますよ。しかし、何処か破綻があり、怖い結末へと流れ込んでいくことも」

「あります。あります。はちゃめちゃになってしまう夢」

「昼間のことが夢に出ると言いますが、おそらく覚えていないでしょう。見ている」

「そうなんですか、それは惜しい。録画が効きませんからなあ」

「しかし、具合が悪いときは、途中で起きるのでしょうかなあ、それで覚えている」

「そうなんですか」

「個人的見解です。体験なので、嘘じゃありません。私に関しては」

「はい」

「患部仕様の夢になるような気もしますが、これはまだ仮説で、思い当たるところが少しある程度で、まだまだ曖昧です。なぜなら、体や精神の悪いところは自覚できないことも多いからです。胃腸のように派手に反応しませんからなあ」

「喉もそうです。鼻も過敏です」

「鼻が悪いと、息が苦しくなり、起きやすい。それで、夢の途中で起きたりしますので、夢を覚えている」

「はいはい」

「だから、私の健康チェックは、夢が少ないことです」

「なるほど」

「昼間の現実でもそうです。夢は願望のようなものでしょ。それが少ないほど、いいんじゃないかと思いますよ」

「ああ、何となく、分かったような気がしたことになります」

「夢の神秘、これは何とでも言えますから」

「はい」

了